

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590168

研究課題名(和文) 俳句的省略表現の理解過程における復元・拡充の心理的解明及び熟達化支援

研究課題名(英文) Research on Understanding Elliptical and Figurative Expressions of Haiku

研究代表者

深谷 優子 (FUKAYA, Yuko)

東北大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：00374877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、スマートフォン等の携帯性に優れた端末の普及に伴い、断片的で省略を含む言語表現が今日用いられやすい実態を指摘した。そうした今日的な言語表現である断片的かつ省略された言語表現の理解過程には、詩歌の理解時に行われる、省略表現を散文的表現にパラフレーズ(paraphrase)する過程(復元過程)とその後より多くの推論や再度パラフレーズを行う過程(拡充過程)の知見が援用できると論じた。さらに、こうしたいわば俳句的省略表現を理解する際の情報の復元・拡充過程を支援する方策として、他者とのコミュニケーションを用いた方法を提案した。

研究成果の概要(英文)：Haiku is a short form of Japanese poetry with limited number of morae, therefore elliptical and figurative expressions are commonly used. Furthermore, it is said that haiku typically conveys two types of information: directly observed objects and implied sentiments of the writer. In a series of researches, how students comprehend haiku and make their explications were investigated. Results showed that students were likely to paraphrase the haiku into prose, but were unlikely to refer to the writer's feelings or thoughts. Exposure to other students' explications had an affect on reexamination of their own explication, including reinstating of the writer's sentiments. Explication of elliptical expressions, such as Haiku, might have been associated with not only comprehension of current digital linguistic information, but also metaphor comprehension and/or ambiguous sentence comprehension. Theoretical and practical implications of these findings are discussed.

研究分野：教育心理学

キーワード：読解 俳句 省略表現

1. 研究開始当初の背景

現代では、文字・視覚・音声情報が大量に発信・受信されている。このような状態は、読解ないし理解すべき対象(量)の増大と、領域・目的等の種類(質)の細分化・高度化を意味することが指摘されている。文章の理解、すなわち読解の心理学的研究においては、従来「単一の文章」が想定されることが多かったが、この枠組みでは現代の言語情報の理解を把握しきれない。複数の言語情報をそれぞれ理解し、一貫した理解を形成するには、読み手がそれぞれの情報を精緻化し、関連付けることが必要とされる。

加えて、高速モバイルインターネットの普及がここ数年来の顕著な社会的変化として指摘できる。こうしたインターネット環境及びスマートフォンやタブレット端末といった携帯性に優れた端末の普及により、読み書き環境は激変したとも言えるが、実際読み書きの心理的過程や産出物については、その変容ないし不変性に関しては未だ解明されていない。

常時インターネットに接続し、いつでもどこでも情報の発信及び受信が生じるという環境において、言語表現(フレーズや文あるいは文章)がどのように理解され産出されるのかといった過程について、従来の文章理解及文章産出の理論やモデルだけで十分に説明/予測できるとは考え難い。

スマートフォンやタブレット端末といった携帯性に優れた端末の普及により、読み書きはどのように変容しつつあるのか。その変容を追い、心理的過程を解明することは、まさに現代社会において必要とされている読解力を明らかにすることであり、これにより、有能な読み手を育成する際に必須であると言える。その際、携帯性に優れた端末の普及に伴って顕著となっている、省略を含む言語表現の読解について、そこでの情報の復元・拡充についての知見を得ることがまず必要とされている。

これを踏まえ、省略表現として、俳句を主な材料として取り上げることが適当であり有用であると思われる。その理由は、第一に、俳句は5音7音5音の計17音/17字(より正確には17モーラ、空白も含む韻律としては24モーラ/拍分とされる)の制約があるなか、直接表現を避け、省略を極めた形での言語表現であり、読者はその表層的な表現を手掛かりとして、情報を復元・拡充することで俳句を理解/鑑賞していくという点で、言語情報の理解および推論の心理学的な検討に適した素材であるからである。

第二の理由として、俳句は日本の伝統文芸であり、直接表現の回避や省略表現は日本の文化や社会のなかでのコミュニケーションの特徴とも言えるものであり、その文化的なりテラシーの獲得は重要であるものの、いわゆる PISA 型読解力と呼ばれる機能的リテ

ラシーの枠には当てはまらず、昨今の PISA 型読解力偏重とも言える研究および教育実践動向ではカバーされていない点であるからである。

第三の理由として、これまでに俳句における情報の省略や直接表現の回避についての理解に関する研究成果がある程度蓄積されており、例えば推理小説や詩歌に対する読書嗜好との関連、さらに小説読解時に展開の意外性に耐えうるかなどの個人特性と俳句理解における情報の復元・拡充とが関連することが示唆されている。これらの知見を援用して、現代において特徴的ともいえる俳句的省略表現の理解について、その解明と支援を試みることで、現代の社会や生活において必要な読解力とその育成に対する提言にもつながれると考えられる。

2. 研究の目的

本研究課題では、断片的で省略された情報の断続的な発信や受信が増大している現状を踏まえて、俳句的省略表現として、字数等による制約があり省略が用いられやすい言語表現を人がどのように推論して情報を復元・拡充する(reinstatement, enrichment)のかを検討する。具体的には以下を目的とする。

俳句のように字数による制約があり省略が用いられやすい言語表現の理解過程における、情報の復元・拡充について、1)文献調査での知見も踏まえて、2)省略を含む言語表現の認識と解釈の実態調査を行い、3)情報の理解過程での復元・拡充を分析し、4)さらにその復元・拡充における変容過程について調査しそのモデル化を行い、ピアレビュー(共同推敲)方式を援用した教授法による熟達化支援を実証的に検討する。いずれも対象は青年・成人である。最終的には熟達化支援につながるコメントの質などの要因や条件を同定し、現代の社会や生活において必要な読解力の育成に対する提言につなげたい。

3. 研究の方法

(1) 省略的表現の理解過程に関する文献の整理

関連文献を精査し、近年の大量発信・受信される言語情報の実態確認を行い、そのうえで、詩歌の理解過程からの知見の援用可能性について検討することを目的とする。対象は、ICT 環境における言語的情報の特徴やその理解に関連する文献および詩歌の理解過程に関する文献である。

(2) 俳句的省略表現の解釈の変化における他者コメントの役割の検討

省略を含む言語表現の理解過程での復元・拡充がどのように生じるのか、その様相

および条件を明らかにすることを目的とする。

大学生 32 名を対象とし、材料として、俳句 12 句を用いた (Table1)。

Table1 用いた俳句およびその作家と季語

手にうけて開け見て落花なかりけり (高浜 虚子)(春)
行く春や 鳥鳴き魚の目は涙 (松尾 芭蕉)(春)
菜の花や 月は東に日は西に (与謝 蕪村)(春)
紫陽花の毬より侏儒よ 駆けて出よ (篠原 鳳作)(夏)
短夜や 空と分かるる海の色 (高井 几董)(夏)
ふるさとの沼のにほひや 蛇莓 (水原秋桜子)(夏)
おりとりて はらりとおもき すずきかな (飯田蛇笏)(秋)
雨粒のひとつひとつが萩こぼす (山口 青邨)(秋)
しずかなる力満ちゆき ばったとぶ (加藤 楸邨)(秋)
いくたびも 雪の深さを 尋ねけり (正岡 子規)(冬)
わが歩む 落ち葉の音の あるばかり (杉田 久女)(冬)
雪降り 時間の束の降ることく (石田 波郷)(冬)

手続：1) 俳句の評価と選句 (a) 既知判断 2 件法, b) 好ましさ 6 件法, c) 好きな一句を選挙), 2) 選択した俳句の解釈 (1 回目), 3) 3 名のコメンターによるピアレビュー (評価およびコメント, 詳しくは Fukaya (2003) を参照のこと), 4) 俳句の解釈 (2 回目), 5) 1 回目と 2 回目の解釈についての内省, 6) ピアレビューで接した他者コメントの内省, の順に行った。なお, 1) 2) 3) の一週間後に, 4) 5) 6) を行った。

(3) 省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充のプロセス：俳句の省略表現の解釈の変容

俳句的省略表現の解釈の変容について, 1 回目の理解/解釈に対する評価がそもそも高い場合に焦点を当て, それでもなお解釈の変容が生じる条件について検討することを目的とする。ちなみに, 意見文産出のピアレビューの知見からは, 1 回目の理解/解釈に対する評価が高い場合, 2 回目での変容は生じにくいことが報告されている。

前述の(2)の研究で得られたデータのうち, 1 回目の理解/解釈に対する評価が高い参加者の 1 回目および 2 回目に作成した解釈を分析の対象とする。

(4) 省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充のプロセス：俳句の省略表現の解釈の変容

俳句的省略表現において直接表現されていない, 省略された, 書かれていない情報をいかに復元・拡張できるのか。その際, ピアレビューのような他者とのコミュニケーションは有用であると思われるが, それがなぜ有用であるのかについて検討することを目的とした。

前述の(2)の研究で得られたデータについて, 1 回目および 2 回目に作成された理解/解釈と, 参加者が受け取った他者の解釈を分析対象として, 作者の心情に言及している程度とその変化を検討した。

4. 研究成果

(1) 省略的表現の理解過程に関する文献の整理

平成 25 年度には, ICT 環境における言語情報の理解について, 既存の研究論文および関連資料を概観し, 省略を含む言語表現における情報の復元・拡充のモデルの方向性について検討した。資料の収集および整理は, 今日, スマートフォンやタブレット型端末などの ICT を用いた断片的な情報の断続的な発信や受信が増大している現状を踏まえて行った。

考察では, 今日的な言語情報の特徴やその理解過程の理論の方向性を検討した。電子書籍と紙媒体での書籍とにおける読解過程や機能の比較に加え, ここ数十年の ICT の進展および高速モバイルインターネット環境の整備, スマートフォンやタブレット型端末などの携帯性に優れた端末の普及が読み書き環境にもたらした影響と, そこで必要とされている ICT に対応し調整していく能力や, 迅速性・即時性, コミュニケーションの重視が特徴とされている “New Literacies” についても検討した。さらに, 大量に発信・受信されている言語情報が断片的であり省略が用いられやすいという観点から, 詩歌との通底性を論じた。

この, あたかも詩歌を理解するように, 私たちは今日的な言語情報を処理しているという見方は, 新たな研究アプローチをもたらす。省略を含む言語表現としての詩歌は, どのように認識されているのか。たとえば, 俳句は, 17 字の制約がある, 省略を極めた形かつ直接表現を避けた言語表現であり, 読み手はその表層的な表現を手掛かりとして, 情報を復元・拡充する (reinstate, enrich) ことで俳句を理解/鑑賞していく (深谷, 2008)。省略されたりや限定されたりする情報からの復元・拡充という点において, 詩歌の理解に関する研究知見を踏まえた研究は, 今日的な省略表現を用いた言語情報の理解過程における知識や推論の役割に関する新たな知見を提供できるものと考えられる。

(2) 俳句の省略表現の解釈の変化における他者コメントの役割の検討

平成 26 年度は、省略表現である詩歌のひとつとして、俳句を今日的な言語情報の特徴をもつ言語表現として取り上げて、その復元・拡充過程における受信・発信、すなわち他者とのコミュニケーションがもつ影響とその役割について検討した。

俳句の特徴としては、省略表現や飛躍、直接表現の回避だけでなく、皆川(2005)が指摘しているように、俳句には「写生、表層の風景描写」と「深層の心理描写」という二重性が存在する。こうした二重性についても、5音7音5音という俳句の表層的な言語表現を手掛かりとして、詠まれている情景や心情について復元・拡充して理解/鑑賞していくことになる(深谷, 2008)ものの、この過程は多義的あるいは比喩的読解とも言えるものであり、容易ではない。

そこで、俳句的省略表現からの情報の復元・拡充が、他者とのコミュニケーションによって変化しうるのか、変化するとしたらどのような点において何がきっかけであるのかを明らかにすることを目的として、俳句の解釈のピアレビュー活動を通じた解釈の変化とその契機としての他者コメントについて検討してきた。

その結果、1) 独力での解釈に対する他者評価が高くなかった場合、その後の他者とのコミュニケーションは解釈を変化させる直接的な効果をもつこと、2) 独力での解釈に対する他者評価が高かった場合でも、他者の視点や表現方式などを契機として解釈がさらに変化しうること、3) 他者とのコミュニケーションを契機とした解釈の変化には驚きや興味関心など情動的な価値評価が伴われること、を明らかにした。

これらの知見を踏まえて今日的な言語表現、すなわち省略表現や断片的な言語情報の理解を考えると、1) 復元・拡充過程は解釈の交換など、他者とのコミュニケーションによって熟達ないし深化、変化する、2) ただし、復元・拡充を行った結果の解釈は収束するものではなく、解釈の転換が潜在的に可能な状態である、3) したがって十全と思われる解釈であっても、他者の着眼点やコメントをきっかけにさらに熟達ないし深化、変化する可能性があり、そこには驚きや興味などが伴うなどが予想される。今後は、こうした熟達ないし深化、変化について実証的に検討することが必要だと言えよう。

(3) 省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充のプロセス：俳句の省略表現の解釈の変容

平成 27 年度は、省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充の過程をさらに精査し、意見文産出の場合には変容しにくいとされる、理解/解釈評価が高い場合に焦点を

当て、俳句の省略表現の解釈の変容が生じる条件について検討した。

大学生 32 名を対象としてピアレビュー方式で俳句の解釈をさせた後、1 回目から優れた理解/解釈を行った者 6 名を分析した結果、復元・拡充の過程において理解/解釈が変容しにくいとされる場合でも一定条件下において省略表現の解釈の変容が生じる現象を確認した。

なお、理解/解釈とコメントの字数の結果から、変容には自分が書いた量以上の分量のコメント、より具体的には 1.5 倍~3 倍程度の字数のコメントが、ピア 3 名分の総計として得られていることが明らかとなった。ただし、受け取るコメントの分量が十分であることは、コメントの内容や方法の情報の多さや多様性を間接的に保障していると考えられるものの、それだけでは変容を引き起こすには十分ではないようである。

(4) 省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充のプロセスの熟達化支援の実証的検討

平成 28 年度は、俳句的省略表現の理解過程における復元・拡充過程の知見を整理し、そのプロセスモデルを提案した。

俳句には、17 字の言語処理以上に、そこに直接表現されていない、省略された作者の思考や心情があり、その書かれていない情報をいかに復元・拡張できるのかがクリティカルとなる。その際、ピアレビューのような他者とのコミュニケーションは有用であると思われるが、それがなぜ有用であるのかについて精査した。

1 回目の解釈において作者の心情に言及した程度で分類し、彼らが得た他者からのコメントと 2 回目に作成した解釈を分析した結果、1 回目の解釈で作者の心情についてある程度詳しく触れていた参加者は全体の 1/3 程度であり、それ以外の参加者は俳句の 17 字を散文的に書き下すなど、そこに多少情景を加えている程度であった。その後ピアレビューを経て 2 回目の解釈では、多くがより作者の心情について言及していた (Table2-Table4)。

Table2 Participants that did not refer to the writer's sentiments in 1st explications

referring to sentiments	1st explication (n=4)	Peers' explications (n=12)	2nd explication (n=4)
none	4	7	0
briefly mentioned	0	1	2
specifically mentioned	0	4	1
other	0	0	1

Table3 Participants that mentioned to the writer's sentiments in 1st explications

referring to sentiments	1st explication (n=17)	Peers' explications (n=51)	2nd explication (n=17)
none	0	11	1
briefly mentioned	17	28	7
specifically mentioned	0	9	6
other	0	3	3

Table4 Participants that elaborated the writer's sentiments in 1st explications

referring to sentiments	1st explication (n=11)	Peers' explications (n=33)	2nd explication (n=11)
none	0	2	0
briefly mentioned	0	11	0
specifically mentioned	11	17	9
other	0	3	2

ここで特筆すべきは、参加者が受け取った他者の解釈は、必ずしも作者の心情に触れたものばかりではなかったにも関わらず、2回目の解釈で多くの参加者が1回目よりもより作者の心情に言及していたことである。これはすなわち、他者の解釈の内容のみが参照されたのではないことが示唆される。そして同時にこの結果は、復元・拡充過程を支援する技法として、ピアレビューのような他者とのコミュニケーションを取り入れた方策の有用性が、不足点のフィードバックや改善策の具体的提案のみに依拠するものでないことをも示唆すると考えられる。

(5) まとめ

本研究は、携帯性に優れた端末の普及に伴ってより広範にみられるようになったと考えられる、省略を含む言語表現の読解について、情報の復元・拡充 (reinstatement, enrichment) に焦点を当てて検討を行った。

ICT環境における言語情報の理解に関する研究を概観して現在大量に発信・受信されている言語情報とは、断片的であり省略が用いられやすいという特徴があり、この点において詩歌との通底性を論じ、詩歌の理解時における情報の復元・拡充過程の解明が、今日的な言語情報の理解にも示唆を与えようことを指摘した (平成25年度)。

これを受けて、省略表現である詩歌のひとつとして俳句を取り上げて、その復元・拡充過程における受信・発信、すなわち他者との

コミュニケーションがもつ影響について検討し、解釈を変化させる直接的・間接的効果があること、とくに間接的な効果の場合には驚きや興味関心など情動付随することを明らかにした (平成26年度)。

さらに、省略を含む言語表現の理解過程における復元・拡充の過程を精査し、当初想定していなかった、復元・拡充の過程において理解/解釈が変容しにくいとされる場合でも、一定条件下において省略表現の解釈の変容が生じる現象を確認した (平成27年度)。

これらの成果を受けて、俳句的省略表現の理解過程における復元・拡充過程として、1) 省略表現を散文的表現にパラフレーズ (paraphrase) する過程 (復元過程) が存在すること、2) このパラフレーズの過程を困難に感じる人が多く、多くの場合、その過程における推論は最小限/最低限であること、3) しかし他者のパラフレーズの結果を参照した後は、再度パラフレーズが行われやすく、その際により多くの推論が行われうること (拡充過程)、4) 参照する他者のパラフレーズが高評価のものでなくても、再度自身でパラフレーズを行う契機となりうること、の知見が得られた。そして、このような復元・拡充過程の熟達化支援として、他者とのコミュニケーションを通じて再度のパラフレーズを促す方策を提案した (平成28年度)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

深谷 優子 2015 省略表現の解釈の変化における他者コメントの役割 「東北大学大学院教育学研究科研究年報」, 62(2), 79-88. 査読無.

深谷 優子 2013 ICT環境における言語情報の理解 「東北大学大学院教育学研究科研究年報」, 61(1), 115-121. 査読無.

〔学会発表〕(計 2件)

FUKAYA, Yuko 2016/7/25 How Students Comprehend Haiku: Through Understanding Elliptical and Figurative Expressions. the 31st International Congress of Psychology 2016 (ICP2016), (Yokohama)

深谷 優子 2015/9/24 俳句の省略表現の解釈の変容 選句理由と他者コメントの分量の観点から 日本心理学会第79回大会 (名古屋)

〔その他〕

深谷 優子 2014 より豊かに自分の物語を紡ぐ 教育時評 192, 学校図書館 no.768, 50-51

深谷 優子 2014 文章の読みかた・まとめかた 教育時評 191, 学校図書館 no.767, 40-41

深谷 優子 2014 外国語で読むこと 教

育時評 190, 学校図書館 no.766, 62-63

深谷 優子 2014 グローバルな読解力,
ローカルな読解力 教育時評 189, 学校図書館
no.765, 50-51

深谷 優子 2014 読書は“善”か 教育
時評 188, 学校図書館 no.764, 58-59.

深谷 優子 2014 読書とライフコース
教育時評 187, 学校図書館 no.763, 70-71.

深谷 優子 2013/9/22 調査報告・パネル
討論 学校図書館げんきフォーラム@宮城
読売新聞 朝刊, p.14

6. 研究組織

研究代表者

深谷 優子 (FUKAYA, Yuko)

東北大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号: 00374877